

講演会「世界遺産ソコトラ島の自然」

2025年9月20日 10:00~11:00

新宿御苑インフォメーションセンター2階

講師：深串泰光さん

参加者：30名

レイチェル・カーソンの「センス・オブ・ワンダー」出版60周年記念イベントとして、深串泰光さんを講師に迎え、「世界遺産ソコトラ島の自然」と題する講演会が開催された。

深串さんがソコトラ島に興味を持たれたのは20年ほど前、同島に人間の血液のような赤い樹脂をもつ竜血樹があることを知ったことという。長年の念願がかなって今年の3月にソコトラ島への渡航となった。ソコトラ島とその特徴ある自然について語って頂いた。

ソコトラ島はアラビア半島から南へ300km、アフリカ大陸のグアルダルフィ岬から東北東へ240kmのインド洋に浮かぶ島で、イエメン共和国（通称イエメン）のソコトラ県に属する。大きさは東西110km、南北40km、最大標高1500m、石灰岩の多い地形で、独自の生態系をもつ。人口は約5万人でほとんどがアラブ系、宗教はイスラム教。島にはヤギが10万頭ほど放牧されている。年間降水量は250mm（日本は1700mm）カタツムリもいる。イエメンでは政府と反政府武装組織（フーシ派）との衝突やイスラエル、米軍のフーシ派支配地域への攻撃などで混乱が続いており、外務省の危険情報はレベル4（退避勧告）であるが、ソコトラ島は平和で危険を全く感じなかった。

ソコトラ島ではピンク色の花が咲くボトルツリーが迎えてくれた。学名はアデニウム・ソコトラナムといい、キョウチクトウ科の多肉植物。ふっくらとした幹が特徴の塊根植物で「砂漠の薔薇」と称される。ソコトラ島の固有種である。また乳香樹はボスウェリア属の植物で、イエメンなどアラビア半島南部やソマリア、エチオピア、エジプトなどアフリカ東部に自生する。樹木から分泌される樹脂は乳香といい、これを焚いて香とし、また香料の原料として利用される。古代エジプトの墳墓から埋蔵品として発掘され、またベツレヘムでイエス・キリストが誕生したときに東方の三博士がイエス・キリストに捧げた贈り物の中に乳香があったといわれる。

竜血樹（学名 *Dracaena cinnabari*）はソコトラ島固有種で、クサスギカズラ科（＝キジカクシ科）トラセナ属の常緑樹。樹高は10-20m、幹のある高さから一斉に枝を出し、非常に密な樹冠を形成し、その樹形はキノコのような独特の姿。枝先には剣状の葉が密生。成長は非常に遅く、推定樹齢は数百年から千年以上。近縁種に学名 *Dracaena draco* があるが、これはカナリア諸島などに産する。

竜血樹の樹脂を集め乾燥させた竜血（シナバル）は、古来より重用されてきた。1世紀の航海記「エリュトラ海案内記」にもソコトラ島の特産品として記載が見える。古代ローマ時代から鎮痛効果や止血のための薬品として利用。中世期に染料やラッカーとして用いられ、「赤い金」と呼ばれた。ソコトラ島の地元民は一種の万能薬として竜血を使用。また家具、バイオリンの製作で仕上げ用のワニスに赤味を加える目的でも利用。中世には錬金術や魔術の用材でもあった。ソコトラ島滞在時には、子供がシナバルを売りに来ていた。（100g 1-2ドルぐらい）

その他ソコトラ島の固有種として、デンドロキシオス・ソコトラヌス（キュウリノキ）があった。ウリ科で樹木として生育する。植物以外にも鳥類、爬虫類（ゲンキヘビ、ソコトラアレチイモリ）、蜘蛛（ソコトラランチュウ 色はブルーで世界一美しい蜘蛛とも称される）、ソコトラ・スナガニ（ピラミッド型の巣をつくる）など珍し

い生物が多くいる。ソコトラ島は独自の生態系をもち、その生物多様性により世界遺産（自然遺産）に登録された。また島には美しいデトワ・ラグーンがありラムサール条約の湿地に登録されている。

### 講演を聴いての感想

ソコトラ島というなかなか行けない場所の珍しい植物の貴重なお話を伺い楽しかった。ソコトラ島は太古の昔、現在のアフリカ大陸、アラビア半島と地続きだったが 200 万年前頃に大陸から完全に分離したそうだ。そして独特の生態系の中で多様な固有種が生まれ存続してきた。講演のスライド表紙に記載あったが「インド洋に浮かぶ植物界のガラパゴス」といわれるのも頷ける。私は、レイチェル・カーソン著「われらをめぐる海」の「島の誕生」の一節を思いだした。「大陸にある生物の大集団から孤立しているため、島の生物たちは、交配によって平均を維持したり、新種や変種を除去するチャンスに恵まれず、おかげで不思議な模様を描いて進化していったのである。この遠くはなれた大地のかけらに、自然は、風変わりな不思議な生物を巧みに創造した。自然が信じられないほど多芸であることを実証するかのよう、島という島には、すべてそれぞれ独特な種が発達している。」（ハヤカワ文庫 日下実男訳）

（文責 井上正太）

